

日田市埋蔵文化財調査報告書第73集

長者原遺跡

長者原遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第73集

2006年

2006年

日田市教育委員会

日田市教育委員会

序 文

この報告書は、当教育委員会が鉄塔建設に先立ち、平成17年度に株式会社NTTドコモ九州の委託を受けて発掘調査を実施した長者原遺跡の調査内容をまとめたものです。

調査では、弥生時代～古墳時代の溝や土坑などが発見され、各時代の土器が出土するなど貴重な成果を得ることができました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や地域の歴史、学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、作業に従事していただきました皆様方や調査にご協力を賜りました関係者の方々に対して、心から厚くお礼を申し上げます。

平成18年8月

日田市教育委員会

教育長 誠山 康雄



遺跡遠景（日田市内を望む）

例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成17年度に実施した長者原遺跡6次の発掘調査報告書である。
2. 調査は鉄塔建設に伴い、株式会社NTTドコモ九州の委託業務として日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 調査にあたっては九工建設株式会社の協力を得た。
4. 調査現場での実測・写真撮影は渡邊が行い、杉野貴幸（文化財保護課調査補助員）の協力を得た。
5. 本書に掲載した遺物実測は渡邊が行い、製図は中川照美（文化財保護課調査補助員）の協力を得た。
7. 空中写真撮影は株式会社九州航空に委託し、その成果品を使用した。
8. 遺物の写真撮影は長谷川正美氏（雅企画有限会社）の撮影による。
9. 本書に使用した図面中の方位は、全体図が国土座標を使用し、個別遺構は磁北で表示している。
10. 写真図版に付している数字番号は挿図番号に対応する。
11. 出土遺物および図面、写真類は日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
12. 本書の執筆編集は渡邊が担当した。

目 次

I 調査に至る経過と組織	1
II 遺跡の立地と環境	2
III 調査の記録	4
IV まとめ	10

写真図版目次

写真図版1 調査区空撮
写真図版2 溝
写真図版3 土坑
写真図版4 土坑、出土遺物

本文写真目次

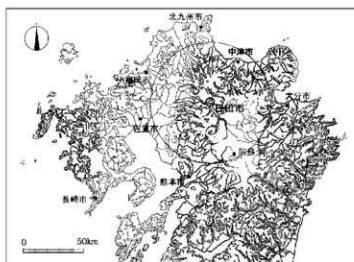
写真1・2 作業風景	1
写真3 基本土層	5

挿図目次

第1図 調査区周辺地形図(1/1000)	1
第2図 周辺遺跡分布図(1/20,000)	2
第3図 調査区配置図(1/2500)	3
第4図 遺構配置図(1/80)	4
第5図 基本土層(1/40)	5
第6図 溝実測図(1/40)	6
第7図 土坑実測図①(1/40)	7
第8図 土坑・倒木痕実測図②(1/40)	8
第9図 出土遺物実測図(1/3)	9

表目次

第1表 出土土器観察表	10
-------------	----



日田市の位置図

1 調査に至る経過と組織

平成 17 年 11 月 18 日付けで九工建設株式会社より市教育委員会へ、日田市大字小山市沖原 192 番 1 での N T T ドコモの铁塔建設に先立つ事前の照会文書が提出された。この開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である長者原遺跡に該当し、これまで 5 次に渡る調査がなされ、周辺には六観音古墳が所在することなどから、その取り扱いについての協議が必要である旨の文書回答を行った。申請者との事前協議を重ねる中で、対象地の全面が掘削されることから遺跡の保存は困難で、また事業対象地の隣地を過去調査しており、弥生時代の住居跡や古墳時代の墳墓群などが発見されていることなどから、対象地約 110 m²の発掘調査が必要であると判断した。

その後、申請者と協議を行い、契約書は開発主となる株式会社 N T T ドコモ九州と取り交わすこととなり、12 月 10 日に委託契約を取り交わし、翌年 1 月 23 日から 3 月 13 日まで発掘調査を実施した。整理作業は 6 月 20 日から 6 月 30 日までの期間実施し、報告書作成を行った。調査に関する日誌は以下のとおりである。

- 1 月 23 日 人力による表土除去作業を開始する。
- 2 月 2 日 表土除去作業が終了し、遺構検出作業を開始する。
- 2 月 3 日 遺構の掘り下げ作業を開始する。
- 2 月 21 日 遺構の掘り下げが完了し、遺構実測作業を実施する。
- 2 月 28 日 空中写真撮影を実施する。
- 3 月 2 日 埋め戻し作業を開始する。
- 3 月 13 日 埋め戻し作業が完了し、機材を撤収して調査を終了する。

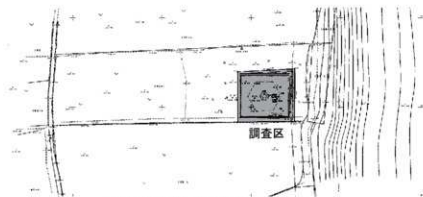
なお、調査組織は次のとおりである。

平成 17・18 年度

- 調査主体 日田市教育委員会
- 調査責任者 謙山康雄（日田市教育委員会教育長）
- 調査統括 後藤 清（同文化財保護課課長）
- 調査事務 高倉隆人（同文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長）、田中正勝（同専門員〔平成 18 年度〕）
伊藤京子（同専門員）、中村邦宏（同主事補）
- 調査担当 波邊隆行（同主任）
- 調査員 土居和幸（同副主幹〔平成 17 年度〕）、今田秀樹（同主任）、行時桂子（同主任）若杉竜太（同主任）
矢羽田幸宏（同主事補〔平成 18 年度～主事〕）
- 調査作業員 桜木順子、高倉澄江、原田保枝、中村洋子、野村クミ子、野村浪子、宮崎キミエ、森山浩幸
森山キクヨ、柳瀬明子、吉田ヤフミ
- 整理作業員 鍛冶谷節子、平川優子



写真 1 調査作業風景



第 1 図 調査区周辺地形図 (1/1000)



写真 2 調査作業風景

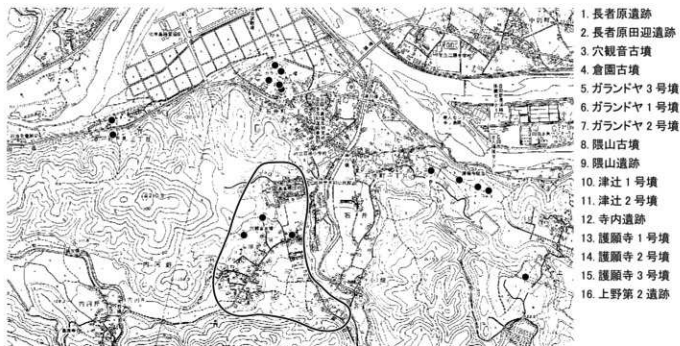
II 遺跡の立地と環境

長者原遺跡の所在する通称「原（はる）」と呼ばれる台地は、日田盆地の南西部、三隈川の左岸に位置し、標高約120mを測る。台地東側は比高差約30mほどの崖面となり、三方は低丘陵に囲まれ、東には串川、西には内河野川がそれぞれ北流して筑後川と合流する。台地上は平坦面を形成し、主に水田や畑地などの農地として利用され、周辺の丘陵及び斜面部は杉林で覆われている状況にあるが、長者原団地建設以後は住宅建設が増加する傾向にある。

周辺の遺跡を概観すると、台地全域が長者原遺跡¹⁾として周知されており、遺跡の中心部には国指定の装飾壁画を持つ穴観音古墳²⁾が所在している。また、本調査区の南側には現在消滅しているが、横穴式石室を主体部とする倉園古墳³⁾があったとされる。台地を北側に下った三隈川が大きく蛇行する箇所には独立丘陵である隈山が所在し、この丘陵上には縄文時代の土偶などが採取され、中世後半の墓地が確認されている隈山遺跡⁹⁾、小型の横穴式石室構造を持つ隈山古墳⁸⁾が位置する。また、丘陵南側には2基の装飾古墳を含む3基の円墳からなるランドヤ古墳群^{5,6,7)}が所在し、さらに三隈川を下った西側には横穴式石室を主体とする円墳の津辻古墳群^{10,11)}が見られる。台地東側の串川対岸には縄文時代～中世・近世に至る遺構・遺物が調査された寺内遺跡¹²⁾が所在し、三隈川と併行して張り出した護願寺の丘陵上には1基の前方後円墳と2基の円墳からなる護願寺古墳群^{13,14,15)}が所在する。さらに東の上野原台地上には弥生時代中期初頭の小児用壟棺墓群が調査された上野第2遺跡¹⁶⁾がある。

さて、長者原遺跡はこれまでに5次にわたる発掘調査がなされている。1次調査では旧石器時代のナイフ形石器や弥生時代後期の竪穴住居跡、2次調査では古墳時代後期の竪穴住居跡、3次調査では縄文時代の土坑や柱穴、4次調査では縄文時代早期の包含層や集石遺構、弥生時代後期前半から古墳時代初めの環壕、古墳時代前期から中期の竪穴式石室や箱式石棺が発掘され、縄文・弥生土器を初め鉄器類が多数出土し、5次調査では中世～近世の炭窯が発掘されている。このほか長者原田迎遺跡¹⁾の調査では、弥生・古墳時代から古代・中世期の竪穴住居跡や掘立柱建物などが発見されている。

火山灰堆積が良好なことから旧石器・縄文時代の包含層が顕著に認められるという特徴のあるこの遺跡は、昭和48年の長者原団地造成の際には、多数の遺物の出土が見られたとの地元の話があるなど、それ以後の弥生時代から近世に至るまでの遺構が残る市内を代表する複合遺跡でもある。



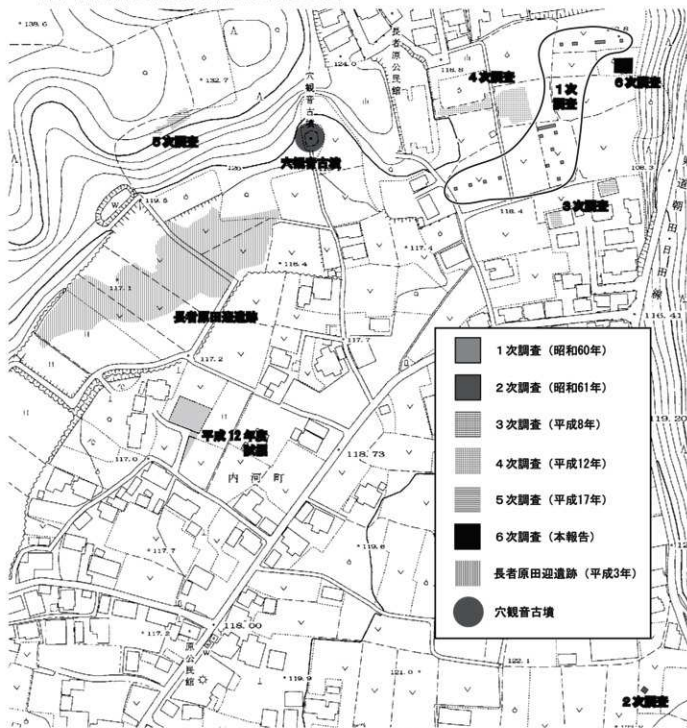
第2図 周辺遺跡分布図 (1/20,000)

〔参考文献〕

- 土居和幸編『長者原遺跡』『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ・Ⅱ』日田市教育委員会 1986・1987年
 土居和幸編『長者原遺跡』『平成9年度（1997年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1999年
 渡邊隆行編『長者原遺跡4次』『平成12年度（2000年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2001年
 行時志郎編『長者原田遺跡跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第5集 日田市教育委員会 1992年
 若杉竜太編『穴観音古墳』日田市埋蔵文化財調査報告書第41集 日田市教育委員会 2003年
 土居和幸編『穴観音古墳Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第55集 日田市教育委員会 2004年
 ※長者原遺跡5次は平成17年度に調査を実施した。

※隈山古墳は平成17年度に地形測量を行い石室の存在が確認されたが、安全のため埋め土保存されている。

※なお、これまで平成12年度試掘調査箇所を5次調査としてきたが、遺跡の存在が確認出来ていないことから、平成17年度調査箇所を5次調査、今回調査箇所を6次調査として、本報告より改めることとする。



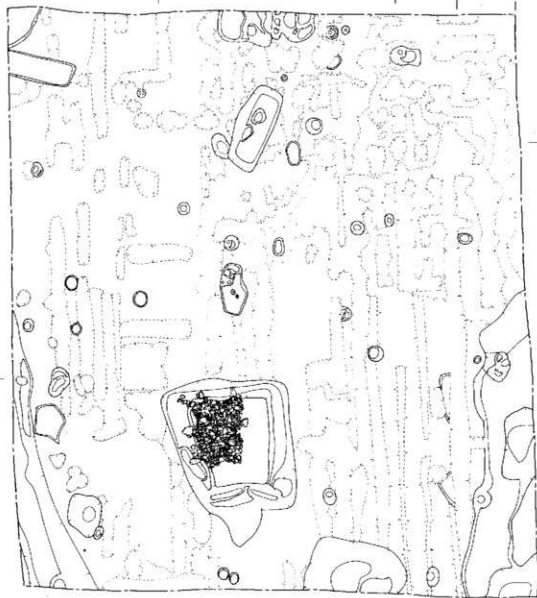
第3図 調査区配置図 (1/2500)

III 調査の記録

(1) 調査の概要 (第4・5図)

今回の調査は対象地周辺が畑地として利用され、機械の搬入が困難であると判断されたことから、これまでの周辺調査結果を参考としながら、人力により表土の掘り下げを行い、遺構の確認を行った。調査区は東西約12m、南北約11mの方形状を呈し、ほぼ平坦な地形であるが、調査区の東側3mほどから極端な崖面が形成されている。

検出面は黄褐色ローム土で、近年の天地返し等による攪乱が著しく、遺構検出面は激しく攪乱を受けていた。検出面上面の黒褐色堆積土も黄褐色土ブロックが混じる状態で、殆どが攪乱層と判断された。これら攪乱を除去

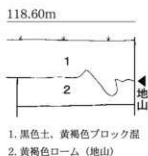


第4図 遺構配置図 (1/80)

し確認された遺構は溝2条、土坑9基、ピットである。これら遺構の埋土は1号溝、1・3・4号土坑が黒褐色土、2号溝、2・6号土坑が淡黒褐色土、8～10号土坑が褐色土を呈しており、7号土坑は黒色土、褐色土が混じり、黄褐色土ブロックが混入していた。なお、5号土坑に関しては当初遺構番号を割り振っていたが、後に攪乱と判断したことから、欠番として



写真3 基本土層



第5図 基本土層図 (1/40)

(2) 遺構と遺物

1号溝 (第6図、図版2)

調査区南側壁面にて検出された溝で、大半が調査区外へと伸びている。確認面での規模は、最大幅で約1.3mを測り、断面形はU字状を呈する。深さは東側が最も深く約60cmを測り、西側へ行くほど浅いことから西から東へと傾斜し、崖面へと流れていたものと考えられる。埋土は、6～8層がしまりがなく、黄色系であることから、地山崩落による自然堆積層の可能性が高く、1～5層は2次的な堆積による埋没層と想定される。

出土遺物 (第9図、図版4)

1、2は弥生土器製の破片である。2は内外面共に縦ハケが施される。出土遺物が少ないことから詳細な時期比定は困難である。

2号溝 (第6図、図版2)

調査区北壁面にて検出された溝で、北半は調査区外へと伸びている。確認面での規模は、最大幅で約1.6mを測り、断面形は浅いレンズ状を呈する。床面は歪な形をしており、場所によっては深くなる箇所なども見られる。深い所で約50cmを測り、東側へ若干低くなっており、蛇行して東西方向に伸びるものと想定される。埋土は褐色系の互層堆積を呈している。

出土遺物 (第9図、図版4)

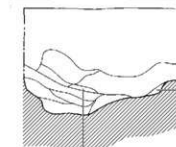
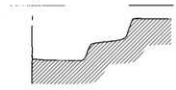
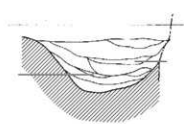
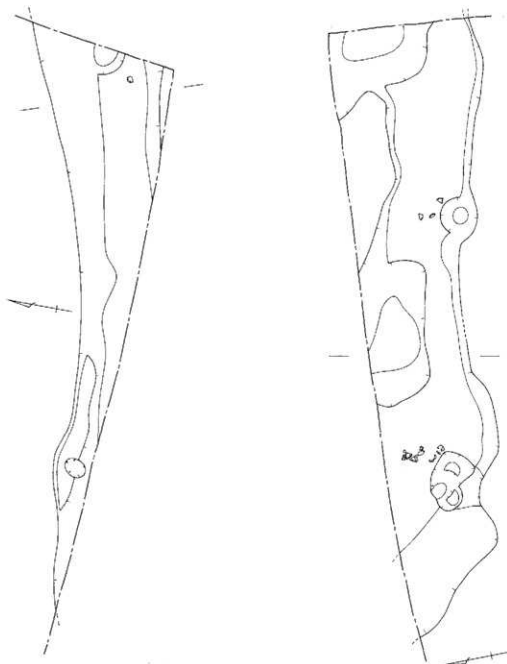
3～14が2号溝より出土した。3～6は須恵器環蓋であり、3・5は天上部との境に凹線状の段を有し、3は口縁端部内面に段を有する。また、3は内面にヘラ記号が施される。7は須恵器环身で、8は須恵器甕である。9・10は土師器甕で、10は外面に横ハケが施される。11～14は土師器高環である。11と12は同一個体と考えられ、口縁部は緩やかに外に開き、脚底部は稜を持って外に開く。13・14も同様な器形を呈するものと想定される。

1号土坑 (第7図、図版3)

調査区南西側にて検出され、南半は調査区外へと伸びる。平面形は長方形状を呈し、確認面での規模は南北長軸1.5m + α、東西短軸約50cm、深さ約25cmを測る。埋土は床面に黄褐色土が堆積し、上面に黒褐色土が見られる。遺物の出土が見られないことから時期は不明である。当初墓塚の可能性も想定したが、埋土が攪乱層と類似することなどから、比較的新しい遺構ではないかと判断した。

2号土坑 (第7図、図版3)

調査区西側にて検出され、平面形は長方形状を呈し、確認面での規模は南北長軸1.8m、東西短軸約80cm、深さ約80cmを測る。埋土は床面付近に10～12層のしまりのない土が堆積していることから、地山崩落に伴う自然堆積層で、その上面にブロック状の互層堆積が見られることから、人為的埋め戻しと判断される。床面は



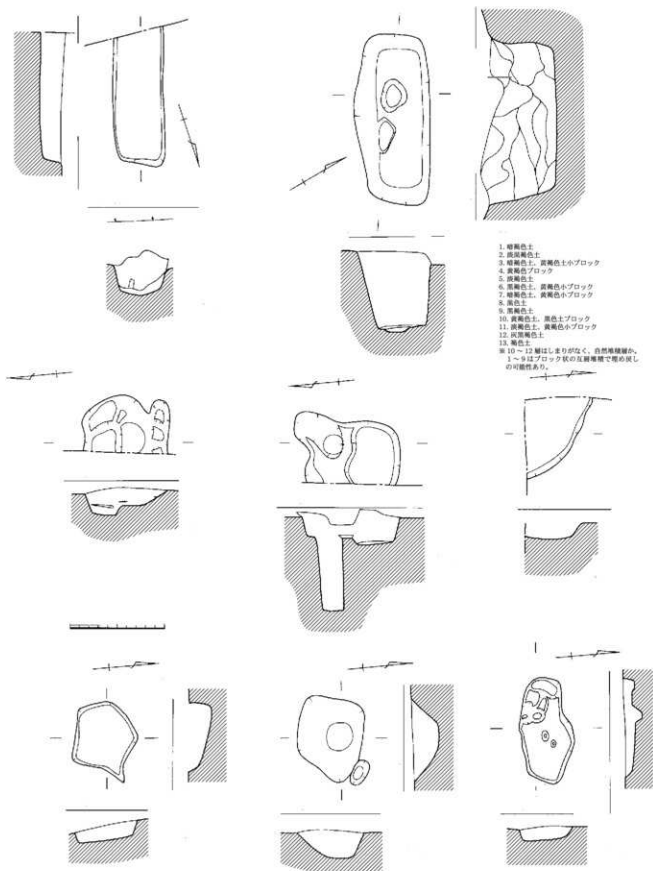
1. 赤褐色土、黄褐色土小ブロック層
2. 赤褐色土
3. 赤褐色土、黄褐色小ブロック
4. 赤褐色土
5. 赤褐色土
6. 赤褐色土
7. 赤褐色土
8. 赤褐色土

1. 赤褐色土 (埋め土)
2. 赤褐色土
3. 赤褐色土、黄褐色土粒子層
4. 赤褐色土
5. 赤褐色土
6. 赤褐色土
7. 赤褐色土、黄褐色小ブロック層
8. 赤褐色土
9. 赤褐色土
10. 赤褐色土、黄褐色ブロック層
11. 赤褐色土

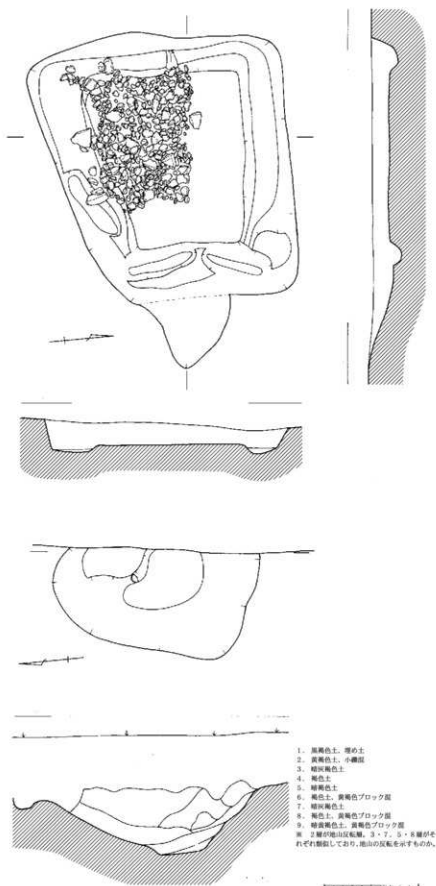
第1～5層は赤褐色系でしまりが有り、6～8層は黄褐色系でしまりが無い。1～3層は2次堆積層、6～8層は使用時の地山崩落堆積層か?



第6図 溝実測図 (1/40)



第7図 土坑実測図① (1/40)



第8図 土坑・倒木痕実測図② (1/40)

られなかった。遺物は小破片が数点出土しているが、時期比定が可能な資料は得られなかった。

3号土坑 (第7図、図版3)

調査区西側で検出された土坑で4号土坑に隣接する。平面形は不整形を呈し、確認面での規模は南北約90cm、東西約60cm + aを測り、深さは約20cmを測る。遺物の出土は見られなかった。

4号土坑 (第7図、図版3)

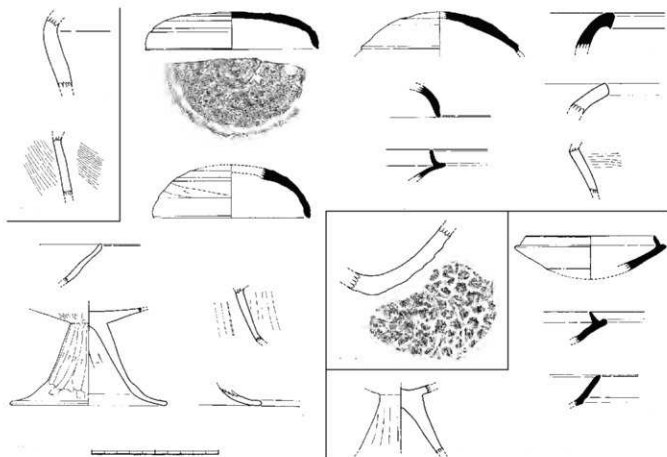
調査区西側で検出された土坑で3号土坑に隣接する。平面形は不整形を呈し、確認面での規模は南北約110cm、東西約80cmを測り、深さは約30cmを測る。北側に柱穴が重複している。遺物の出土は見られなかった。

6号土坑 (第7図、図版3)

調査区南西隅で検出された土坑で、1号土坑に隣接する。平面形は楕円形を呈し、確認面での規模は南北約70cm + a、東西約80cm + aを測り、深さは約20cmを測る。遺物の出土は見られなかった。

7号土坑 (第8図、図版3)

調査区東側で検出された土坑である。平面形は方形を呈し、確認面での規模は南北約2.7m、東西約2.8mを測り、深さは約30cmを測る。土坑の周囲は溝状に掘り窪められており、床面は平坦を呈する。土坑南西側床面付近には小石が敷き詰められていた。埋土に地山ブロックが混じることなどから、近年の遺構ではないかと判断された。遺物は須恵器等の小片の混入が確認された。



第9図 出土遺物実測図 (1/3)

8号土坑 (第7図、図版3)

調査区南側で検出された土坑で1号溝に隣接する。平面形は不整形を呈し、確認面での規模は南北約70cm、東西約80cmを測り、深さは約20cmを測る。遺物の出土は見られなかった。

9号土坑 (第7図、図版4)

調査区南東側で検出された土坑で1号溝に隣接する。平面形は不整形を呈し、確認面での規模は南北約70cm、東西約90cmを測り、深さは約30cmを測る。遺物の出土は見られなかった。

10号土坑 (第7図、図版4)

調査区南東側で検出された土坑で4号土坑に隣接する。平面形は不整形を呈し、確認面での規模は南北約60cm、東西約110cmを測り、深さは約10cmを測る。遺物の出土は見られなかった。

倒木痕 (第8図、図版4)

調査区東側で検出された土坑で、平面形は不整形を呈し、確認面での規模は南北約2.2m、東西約1.1m + α を測り、深さは約70cmを測る。土層を観察すると、2層が地山と同一土層で、その下に褐色の埋土が埋没し、層位の変転が見られることから、倒木痕と判断した。なお、床面付近からは縄文土器の底部が1点出土したのみである。

出土遺物 (第9図、図版4)

15は縄文土器深鉢の底部である。尖頭状の底部を呈し、やや器面は厚い。外面全面にはやや大振りでない楕円押型文が施される。内面はナデ調整である。

(3) その他の遺物

表土を除去時及び、全体の攪乱除去時に出土した遺物を一括して紹介する。

16は土師器高杯の脚部である。17、18は須恵器坏身である。いずれも口縁部を内傾させている。19は須恵器無蓋高杯の口縁部か。口縁下半部に稜を有する。

IV まとめ

今回の調査では、溝2条、土坑10基が確認された。

まず、これらの遺構の時期についてである。1号溝は、弥生土器の破片から弥生時代以降の時期に所属すると考えられるが、埋土が黒味の強い上面の堆積層と類似することから、比較的新しい可能性が考えられる。次に2号溝であるが、床面付近からまとまって出土している遺物から時期比定が可能である。須恵器坏身の口縁端部の段が殆どなくなっており、やや口径も小形化していることから、TK 43前後の範疇に収まる。また、土師器高杯は脚部の開き具合から重藤編年9期に相当する。これら須恵器・土師器の特徴から概ね6世紀後半から末と捉えられる。土坑は遺物の出土が少なく時期比定が困難であるが、埋土の状態から7号土坑は比較的新しいものと考えられる。また、1、3、4号土坑は1号溝埋土と類似する黒色系であることから、現時点では比較的新しいものと位置づけたい。そのほか、2・6・8～10号土坑は2号溝埋土と類似する褐色系であることから、同時期あるいはその前後と考えたい。さて、倒木痕出土の縄文土器は楕円押型文の崩れ具合から縄文時代早期の田村式相当と考えられる。隣接する1次調査区で縄文早期の集石が確認されていることなどから、調査区周辺に生活跡が広がっていたことを示す資料と言える。

さて、今回の調査は台地縁部に位置しているため、Ⅱにおいて述べた過去の調査例に比べると遺構密度がかなり薄い。しかし、2号溝の6世紀後半～末の遺物の出土は興味深く、穴観音古墳の築造とほぼ時期を同じくしている。これまで、古墳期の生活遺構は2次調査・長者原田迎遺跡において確認されるのみで穴観音古墳の東側では確認されていなかった。今回の調査結果から、穴観音古墳を築造した集落が台地東側縁部に展開している可能性が想定されよう。こうした意味でも今後の石井地区の集落変遷や立地を想定し、日田の古代史を考える上で大きな成果といえよう。

(参考文献)

田辺昭三「陶器古家器Ⅰ」平安学調査古クラブ 1966

重藤輝行「仁右衛門畑遺跡を中心とした浮羽郡の古墳時代土師器編年」「仁右衛門畑遺跡Ⅰ」浮羽ハイパースタジオ関係文化財調査報告書第12集 福岡県教育委員会

2000

第1表 出土土器観察表

探検番号	遺物名	形状	印痕	法 量(cm)		測 量		胎 土	構成	色 調		備 考	
				口径	底径	器高	内面			外面	外面		内面
第10001	1号溝	弥生土器	破	-	-	-	ナマ	ナマ	A,B,C	良好	褐色褐色	褐色褐色	
第10002	1号溝	弥生土器	破	-	-	-	ナマ	ナマ	E,F	良好	赤褐色	赤褐色	
第10003	2号溝	須恵器	坏身	(13.6)	-	2.8	割断→ナマ,割断ナマ	割断ナマ	A,B,C	良好	褐色	褐色	へり取部有
第10004	2号溝	須恵器	坏身	(12.2)	-	-	割断→ナマ,割断ナマ	割断ナマ	B,C	良好	褐色	褐色	
第10005	2号溝	須恵器	坏身	-	-	-	割断→ナマ,割断ナマ	割断ナマ	B,C	良好	赤褐色	赤褐色	
第10006	2号溝	須恵器	坏身	-	-	-	割断ナマ	割断ナマ	B,C	良好	褐色	褐色	
第10007	2号溝	須恵器	坏身	-	-	-	割断ナマ	割断ナマ	B,C	良好	赤褐色	赤褐色	
第10008	2号溝	須恵器	破	-	-	-	割断ナマ	割断ナマ	B,C	良好	褐色	褐色	
第10009	2号溝	土師器	破	-	-	-	ナマ	ナマ	A,B,C	良好	褐色褐色	褐色褐色	
第10010	2号溝	土師器	破	-	-	-	ナマ	ナマ	B,C,D	良好	褐色	褐色	
第10011	2号溝	土師器	高杯	-	-	-	ナマ	ナマ	A,B,C	良好	赤褐色	赤褐色	
第10012	2号溝	土師器	高杯	-	(12.5)	-	ナマ,ナマ	ナマ	A,B,C	良好	赤褐色	赤褐色	
第10013	2号溝	土師器	高杯	-	-	-	ナマ	ナマ	B,C	良好	赤褐色	赤褐色	外面に丹塗痕跡
第10014	2号溝	土師器	高杯	-	-	-	ナマ	ナマ	B,C	良好	赤褐色	赤褐色	
第10015	倒木痕	縄文土器	押型	-	-	-	縄文押型文	ナマ	A,B,C	良好	赤褐色	褐色褐色	
第10016	教土中	土師器	高杯	-	-	-	ナマ	ナマ	B,C	中々不良	赤褐色	赤褐色	
第10017	教土中	須恵器	坏身	(10.0)	-	-	割断→ナマ,割断ナマ	割断ナマ	B,C	良好	褐色	褐色	
第10018	教土中	須恵器	坏身	-	-	-	割断ナマ	割断ナマ	B,C	良好	赤褐色	赤褐色	
第10019	教土中	須恵器	無蓋高杯	-	-	-	割断ナマ	割断ナマ	B,C	良好	褐色	褐色	

※ A:角閃石 B:石英 C:長石 D:赤色粒子 E:白色粒子 F:黒色粒子 G:霞母 H:砂粒



調査区遠景（南から）



調査区全景（真上から）

写真図版 2



①調査完了風景（北西から）



②1号溝（西から）



③1号溝土層



④1号溝遺物出土状況



⑤2号溝（西から）



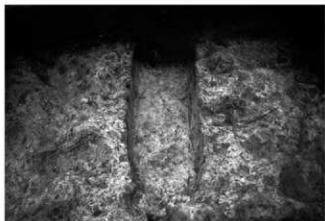
⑥2号溝土層



⑦2号溝遺物出土状況①



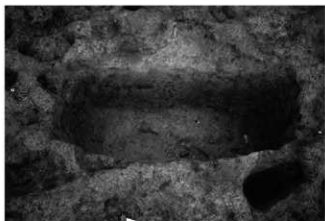
⑧2号溝遺物出土状況②



① 1号土坑（北から）



② 1号土坑土層



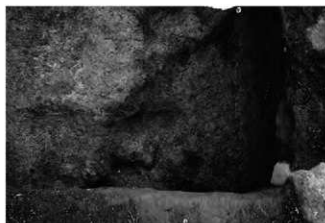
③ 2号土坑（北から）



④ 2号土坑土層



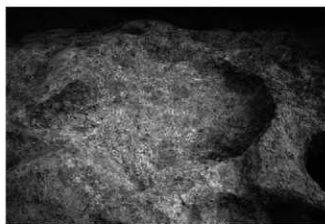
⑤ 4号土坑（真上から）



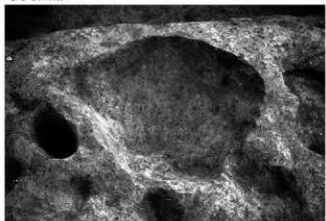
⑥ 6号土坑（真上から）



⑦ 7号土坑（西から）



⑧ 8号土坑（北から）



① 9号土坑 (北から)



② 10号土坑 (北から)



③ 倒木痕 (西から)



④ 倒木痕遺物出土状況



9-2



9-3



9-4



9-5



9-8



9-12



9-15



9-16



9-17

報告書抄録

ふりがな	ちょうじゃばるいせき
書名	長者原遺跡
副書名	-
巻次	-
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第73集
編著者名	渡邊隆行
編集機関	日田市教育委員会文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2006年8月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		地町村	遺跡番号					
長者原遺跡 6次	ひたしおおあきおやま 日田市大字小山 あきおきはら ばん 字沖原192番1	44204-6	651110	33°18'30"	130°54'26"	20060123 ~20060313	約110㎡	鉄塔建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
長者原遺跡 6次	集落	古墳時代	溝	2条	土師器、須恵器	
			土坑	9基	弥生土器	

長者原遺跡

2006年8月31日

編集 日田市教育委員会 文化財保護課
〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1

発行 日田市教育委員会
〒877-8601 大分県日田市田島2-6-1

印刷 山本印刷有限公司
〒877-0059 大分県日田市大日町3986-3